

1993年12月12日

# 平安京左京二条四坊十一町

## 発掘調査現地説明会資料

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所在地 京都市中京区柳馬場通竹屋町下る五丁目242番地  
調査期間 1992年12月16日～1993年12月末（予定）  
調査面積 2450m<sup>2</sup>（第2・第3調査区）

### 1. はじめに

この調査は、御所南小学校校舎新築工事に伴い京都市教育委員会の委託を受けて（財）京都市埋蔵文化財研究所が実施し、第1調査区に引続き継続しているもので、調査地は敷地の北部にあたります。

調査地は平安京の北東隅に位置します。それを条坊で表示しますと左京二条四坊十一町となり、具体的には中御門大路の南、二条大路の北、東洞院大路の東、東宮極大路の西に囲まれた範囲（それを坊という）を16等分した11番目の町にあたります。

調査地周辺は、平安時代中期から天皇の仮御所や貴族の邸宅が建ち並ぶ京内でも屈指の屋敷街で、白河天皇の大炊御門殿、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇の大炊御門京極殿、後嵯峨天皇が後深草天皇に譲位した冷泉万里小路殿などの邸宅があり、当時の政治・社会において極めて重要な地域であったことがうかがえます。当地には、文献から11世紀後半には「源高房」、12世紀後半には「藤原経房」の貴族の名が見えることからこれらの邸宅があったことがしられます。時代は経て室町時代の初め、後醍醐天皇による建武の新政がなされましたが、この敷地の南の十町に天皇の御所である「二条富小路内裏」が造営されにわかに活気を呈するようになります。ただその時当地がどのような性格を有していたかはさだかでは有りません。そして安土桃山時代になると豊臣秀吉による京都の町の大改造で平安京の街区とは違った全く新しい都市が形成され、当地の周辺には諸大名の京屋敷が置かれたり町屋が分布します。当地では、寛永年間の洛中絵図では飛騨高山の藩主「金森出雲守」、貞享元年以降には豊前小倉藩主「小笠原遠江守」の名が見え、各大名の京屋敷が置かれていたことがしられます。そして明治8年（1875）には「天公ハ真ニ富有ナリ」という蘇軾の句から命名した富有小学校が設置され、明治24年（1891）に当地に移転され、現在にいたっています。

## 2. 発見された遺構

敷地内の土の堆積状況は、第1調査区とほぼ同じで、敷地の現地表から約50cmまでが富有小学校を建設する際の盛り土整地層です。その下には元治元年の大火（蛤御門の変1864年）、江戸時代後期の整地層が約20cm、天明の大火（1788年）、1度の洪水層、宝永5年の大火（1708年）、2度の洪水層があり、その下には安土桃山時代の整地層があります。調査は天明の大火の直前の時代から開始しました。以下調査の進行に従い、新しい時期から現在判明している中世にいたる主要な遺構群について報告します。

### (1) 江戸時代中期～後期

第2調査区では、石組井戸、ルツボ組井戸、便所、土蔵、石組土塋<sup>とくら</sup>、ごみ穴等が数多くみられました。その中で町屋境を画すると考えられる石組列や土間タタキの痕跡から富小路通に面した町屋が5軒、竹屋町通に面した町屋が3軒復元することができました。そのうち南端で確認された町屋は間口、奥行きとも一番広く、奥には5間×4間の離れ座敷と考えられる建物を確認しました。このような町屋の配置や各遺構群の状況は宝永の大火以前までの遺構群にも共通し、あまり大きな変化が無いことが判明しました。なお調査区の南端の一番規模の大きな町屋内で宝永の火災による建物の壁が崩壊した痕跡が確認されました。

第3調査区でも遺構の種類や分布は第1・2調査区と同様ですが、それに比べてやや井戸が密集して分布する傾向がみられます。ここでも町屋境の石列や土間タタキの分布に注目すると竹屋町通に面する町屋が5軒、柳馬場通に面する町屋が4軒以上確認されました。第1調査区と合わせますと19軒以上の町屋が調査範囲に存在したことが判明しました。なお調査区の南端で東西に約27mにわたって検出した3段に積まれた石垣は、町屋と大名屋敷を区画する施設と考えられます。

### (2) 安土桃山時代～江戸時代前期

第2調査区では、中期以降の遺構と同様井戸が見られますが各町屋内には1ないし2基しかなく、少なくなる傾向にあります。また土蔵は全くない反面、それらが立地していた宅地の奥に穴蔵<sup>あなぐら</sup>と考えられる規模の大きな方形の土塋群がみられるようになります。この遺構は中期までの間に2・3回の造り替えがみられます。またこの時期には小さい規模の長方形を呈する河原石組の土塋の分布も見られます。ただ町屋境はほとんど変更がないことから、桃山期から戸数に変動がないことがうかがえます。このようなあり方は第3調査区でもうかがえます。ただ、各町屋ごとで方形土塋が密集するものや、規模の異なる石組土塋群で構成されるものなど、その配置や密度に多様なありかたがうかがえます。ここでも町屋の間口に変動があるものの戸数には変化がみられません。ただ町屋内で注目すべき遺

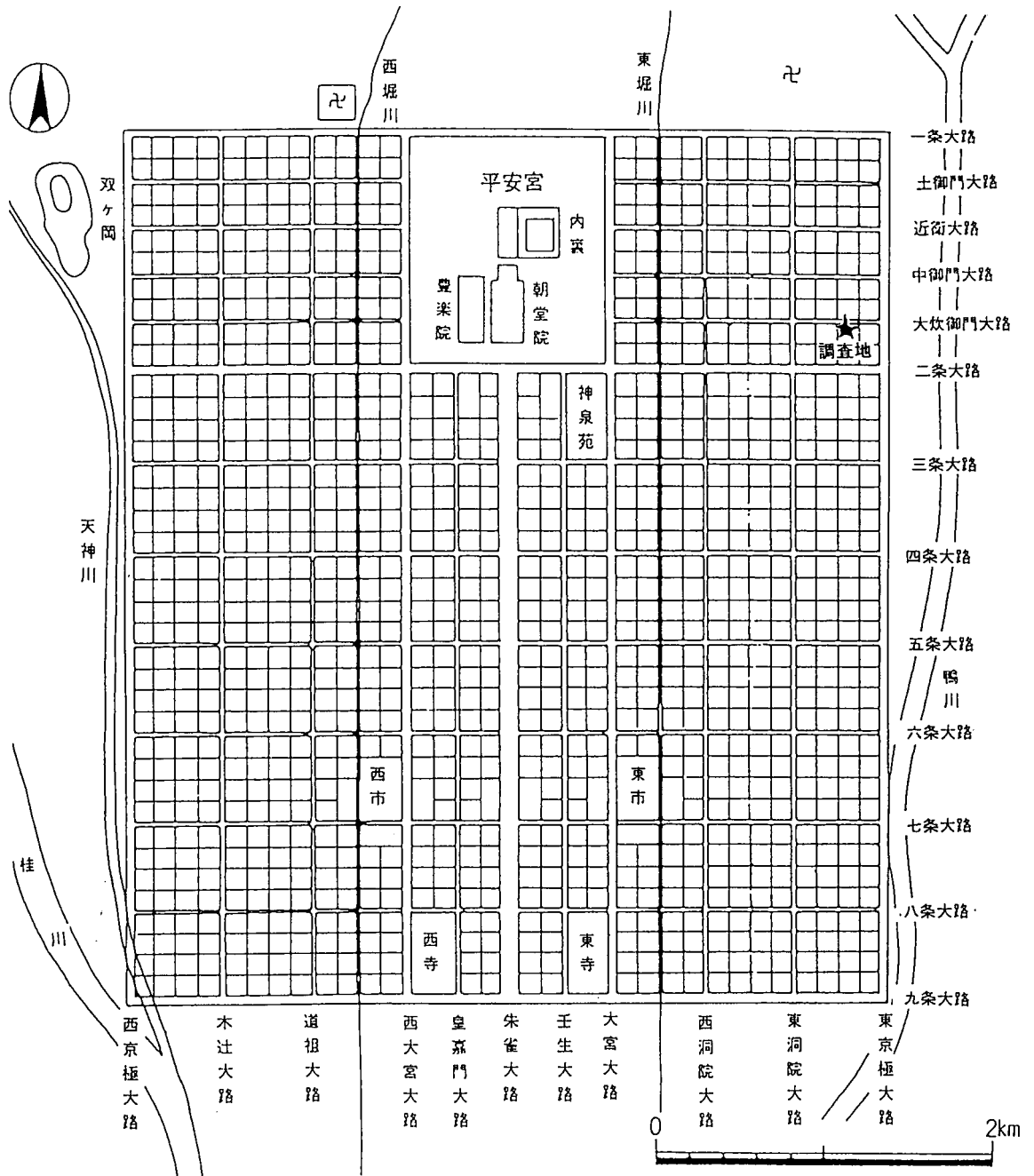
構が発見されています。第3調査区の南端東部にて長辺1.3m、短辺0.6m、深さ0.4mの長方形土塼が1基あり、その中には多量の鏡の鑄型とともにルツボ、吹子羽口、焼き台等が出土しました。このことから当地で鏡を鑄造していたことがうかがえます。なお大名屋敷を画していた石垣の下から幅50cmの溝が確認され、底部には1.2m間隔で礎石を持つ柱穴が並んでいました。これは塀を造る際の布掘と考えられ、屋敷を画する施設であったことがわかりました。

### (3) 鎌倉時代～室町時代

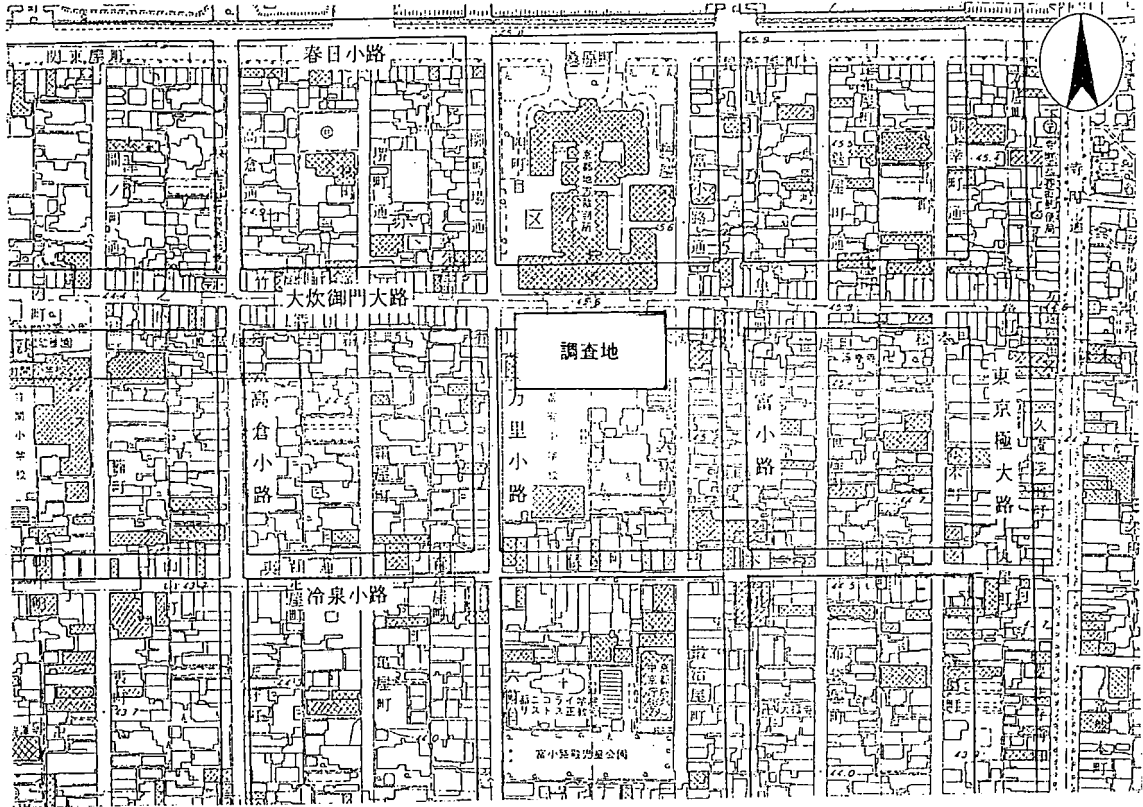
第3調査区で大炊御門大路推定南側溝より、やや北側で幅3m、深さ70cm、断面凹形を呈する東西溝が1条あり、この時期の道路側溝と考えられます。この溝の続きは第1調査区でも見られましたが、十一町の北端全域を画するものではなく、東西に2等分する中軸線で止まっています。この溝の南に2.7m離れて幅80cm、深さ1.2m、断面V字形の東西溝が1条あり、東に流れています。すなわち、十一町の中央で断面形が全く異なる2条の溝が食い違い状態を呈することになります。これらの溝の両肩沿いには、小規模な柱穴や方形土塼があります。宅地内の状況として、十一町の中央に幅2.3m、深さ1.7m、断面箱形を呈する南北溝が1条あり、北一・二門境界付近で西に折れ曲がって止まります。溝の両側には柱列がみられます。それから東に12m離れた位置に幅1.7m、深さ1.2m、断面V字形の南北溝が1条あり、調査区より南北にさらに伸びています。その他、石組の井戸や柱穴が集中する箇所がありますが、現在まではっきりした建物跡を推定するにはいたっていません。なお第2調査区の折れ曲がりのある南北溝の南側と第3調査区の東西溝北肩の東寄りで各々地鎮跡を1箇所確認しました。

## 3. 発見された遺物

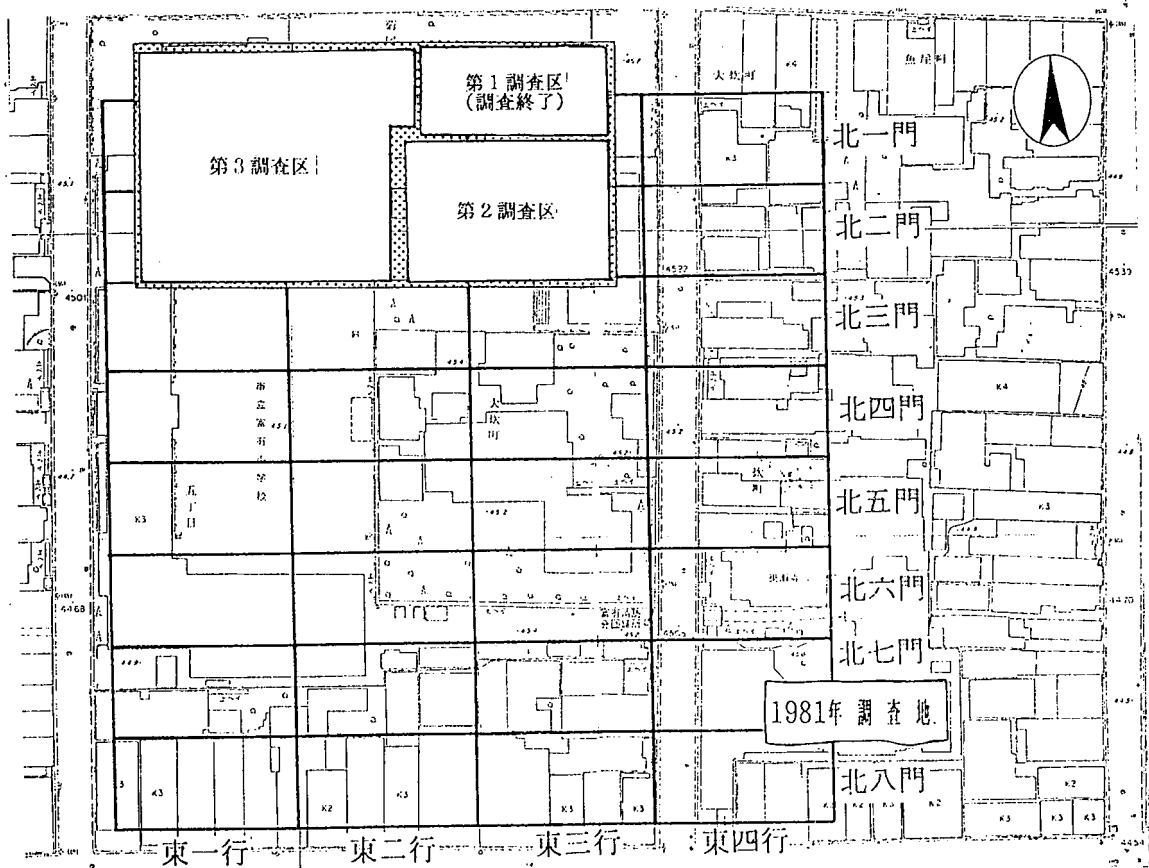
第2・第3調査区で現在まで整理箱で出土した遺物は1170箱を数えます。各時代の様々な遺物が出土しています。その中でも江戸時代前期以降のものは井戸や土塼から伊万里、京焼、備前、堺播鉢、焼き塩壺、土師器小皿とともに伊万里の鼓形五彩、赤楽茶碗、鏡、鐺などの銅製の刀装具が出土しています。桃山時代から江戸初期の方形土塼からは美濃瀬戸、唐津、備前、信楽、丹波等の茶陶類や銅製の十能が出土しています。室町時代の井戸からは多量の土器と共に土師質の七輪が、平安時代の土塼からは軒瓦等が出土しており注目されます。



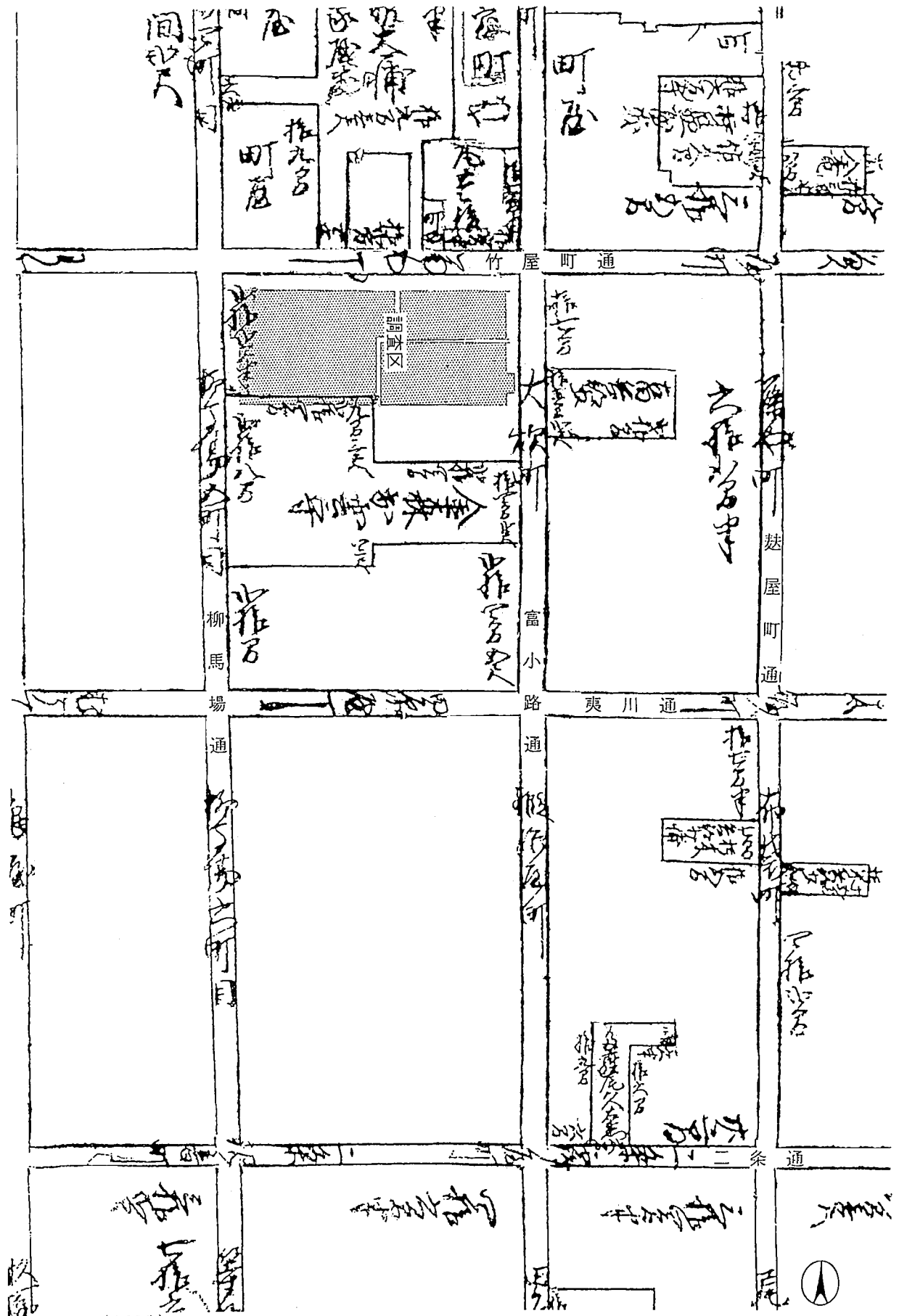
平安京の条坊と調査地



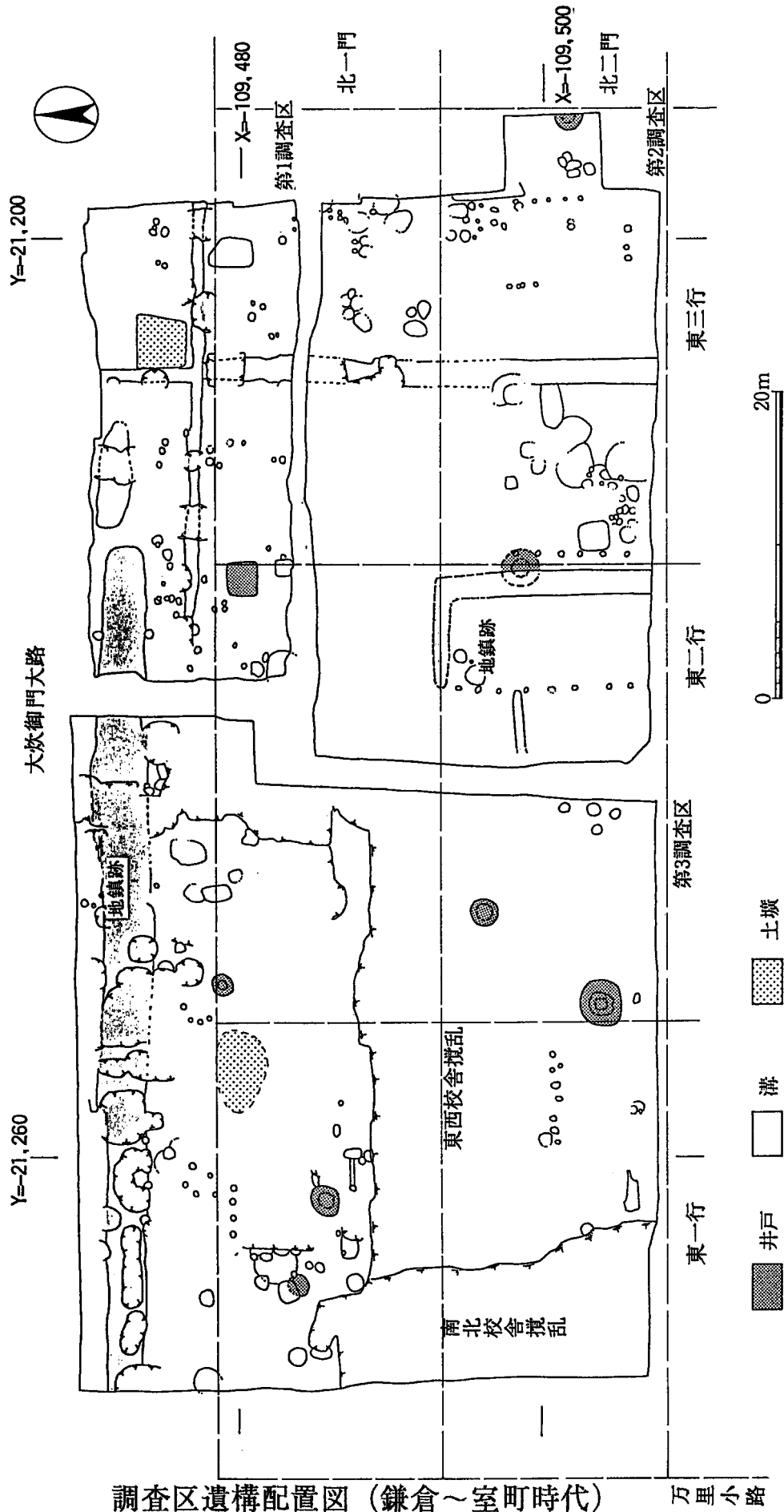
調査地付近の条坊復元図



左京二条四坊十一町内の土地区画 (四行八門制)

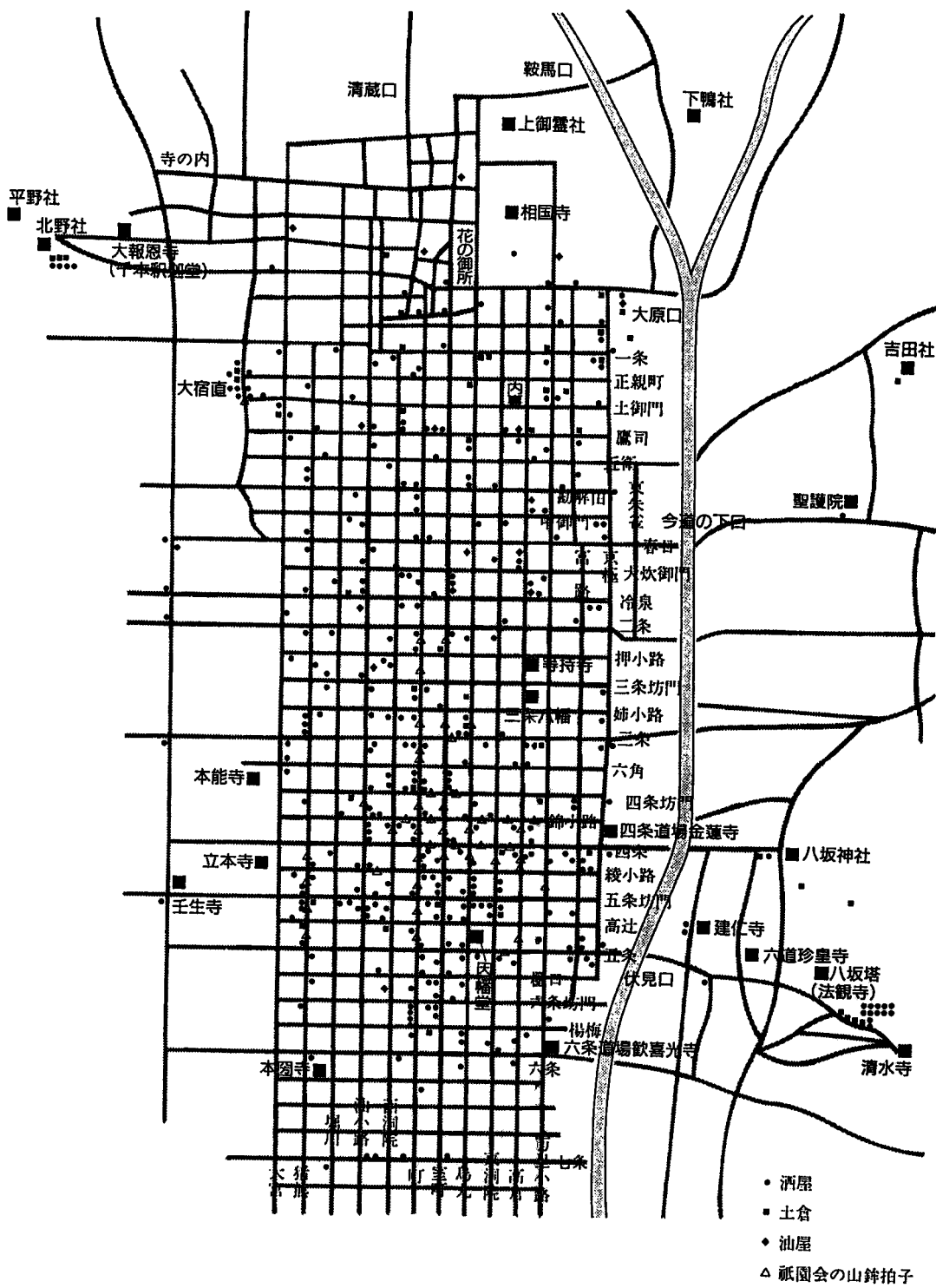


(1637)  
 寛永十四年洛中絵図（宮内庁蔵）に調査区と現通名を加えた図



調査区遺構配置図 (鎌倉～室町時代)

万里小路



室町時代の京都市街図

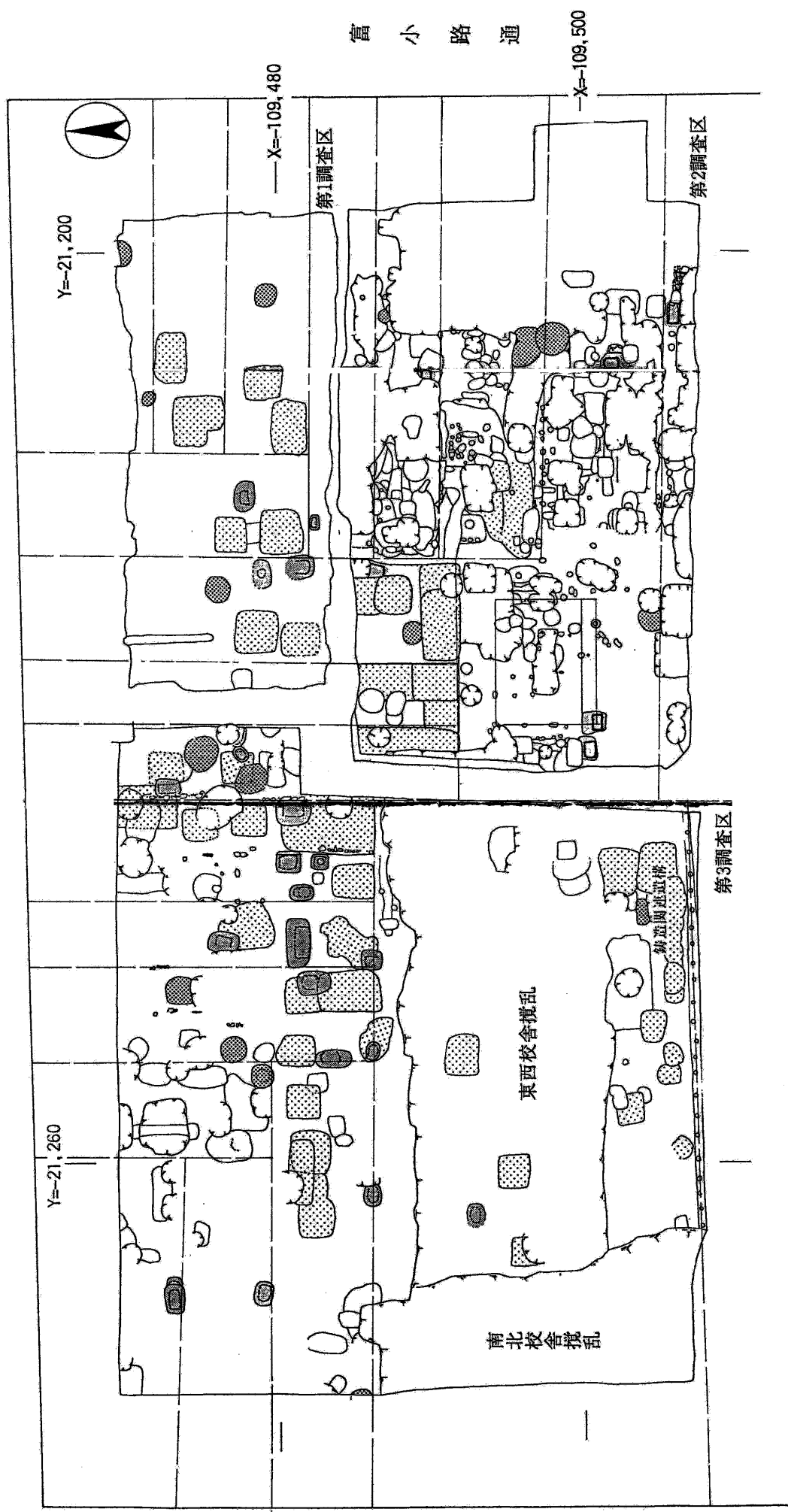
(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門I』より)



竹屋町通

富小路通

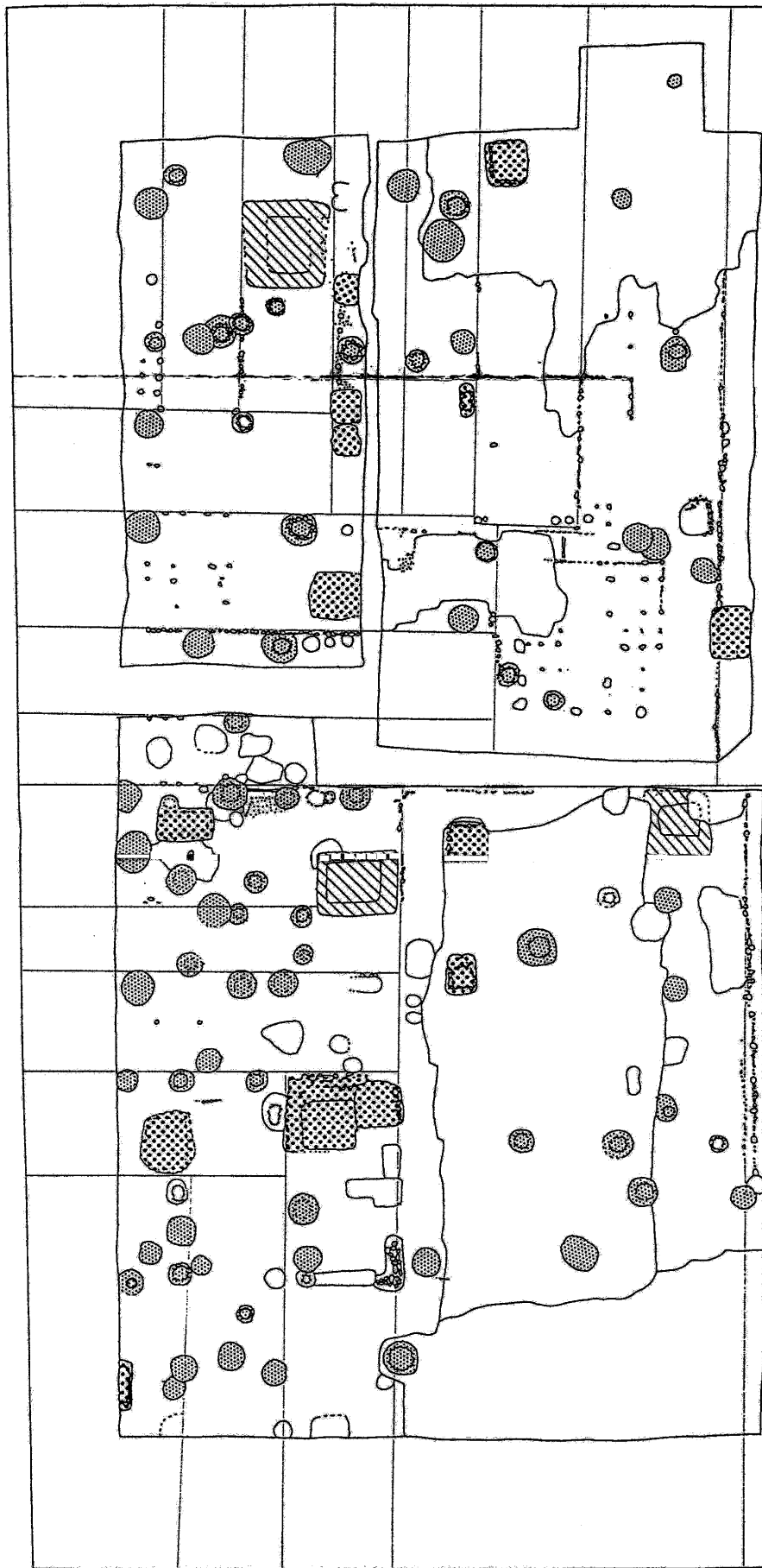
柳馬場通






調査区遺構配置図 (桃山～江戸時代初期)



竹屋町通



-  井戸
-  土蔵
-  石室

調査区遺構配置図 (江戸時代中・後期)

柳馬場通

富小路通